

タイトル ヘーゲルのカント批判を再考する

副題 「当為」のゆくえ

氏名 山蔦 真之(名古屋商科大学)

カント倫理学に対するヘーゲルの批判、とりわけその「空虚な形式主義」の批判はよく知られたものである。若き日の著作である「自然法論文」から後年の『法哲学』に至るまでヘーゲルは、カントの定言命法を、実質的な内容を産み出すことができないものと指摘している。この批判に対しカント倫理学の立場からは、ヘーゲルがカントの定言命法を十分に理解していないこと、たとえばヘーゲルが定言命法の「普遍化可能性」の定式にしか着目しておらず、定言命法が含む「人間性」や「自律」といった要素を無視している、という反論がされてきた。あるいは、ヘーゲルでなくてもされるカント倫理学の「形式主義」批判に対しては、カントは倫理学において経験的な内容を無視していないとは主張しておらず、定言命法の「適用」においては現実の世界の具体的な状況が考慮されている、という擁護がしばしばなされる。これに対してヘーゲルの立場からは、「空虚」であるという批判は道徳内容を実現させる「動機」の欠落を意味するものだという再反論、あるいは、ヘーゲルのカント倫理学批判はより広い文脈において、個人主義的なカント倫理学における共同体・社会への視線の欠落を指摘したものだという主張が聞かれる。カントとヘーゲルの対決は、今日のリベラリズムとコミュニタリズムの対立にも読み替えられることもあり、未だ解決の見えぬものである。

しかしながら研究者の中には、ヘーゲルのカント批判を倫理学や政治的立場の対立に終わらせず、より深い哲学的立場の相違として読むべきだという意見もある。たとえば S・セジウィックは次のようにそれを表現している。「カントの定言命法が形式的だというヘーゲルの批判は、カントの批判体系の核心的主張をヘーゲルが拒絶したことの一つの個別事例であって、その拒絶を理解することなしには、定言命法の批判も理解することはできないのだ」(Sally Sedgwick, *Hegel's Critique of Kant*, Oxford UP 2012, p. 7)。本発表もまたこのような問題意識を共有したうえで、ヘーゲルがカントに向ける「当為 Sollen」批判にカントとヘーゲルの対立を探ってみたい。

『フィヒテとシェリングの哲学体系の差異』(1801)や『信と知』(1802)においてヘーゲルは、カントやフィヒテといった、有限と無限の対立を解消できない「反省哲学 Reflexionsphilosophie」を批判する際に、彼らが「当為」にとどまったという批判をしている。ここでの「当為」とは、狭義の意味での実践哲学に限られず、カントであれば純粋悟性が感性の与える経験的なものと一致しなければ「ならない」といわれるカント哲学の「演繹」の課題)、フィヒテであれば「自我」と「非我」が一致しなければ「ならない」というように、理論哲学、あるいは彼らの哲学全体が持つ二元論的な構造に向けられている。これに対してヘーゲルはシェリングの立場につきつつ、「当為」ではない絶対的な統一こそが真の「思弁的な」哲学の対象であると主張したのである。

この「当為」批判は、『精神現象学』以降、ヘーゲルがシェリングの同一哲学の立場から離反し、独自の体系を構築したのちにも変わらずなされている。『エンツュクロペディー』の「序論」中、「批判哲学」を論じる中でヘーゲルは再びこの「当為」批判をカントに向けている。ヘーゲルはそこで、カントが『判断力批判』で言及した「直観的知性」を「思弁的」と称賛しながらも、しかしカントがその「直観的知性」の発想を十分に追求せず、「当為」の概念へと「逃げてしまった」と論じている。

ヘーゲルがここで参照しているのは『判断力批判』76, 77 節である。この節は、たとえば E・フェルスターが、カント以降の哲学の展開にとって決定的に重要な意味を持った箇所としてとりあげたものでもある。そこでカントは「挿話的」な議題であると断りをいれつつ、「直観的知性」、ある

いは「知的直観」という概念について語っている。「知的直観」はすでに『純粋理性批判』においても、論理的には想定できるが人間には不可能な能力、つまるところは神的な存在が所有する認識能力としてとりあげられていた。批判哲学の締めくくりとも言える『判断力批判』のこの箇所でも、カントは自らの批判哲学全体の観点から、あらためて「直観的知性」がどのような意味を持つのかを論じている。

それによれば、「直観的知性」が人間にとって不可能な認識能力であることは揺るぎないながらも、その不可能性は理論哲学だけでなく、『判断力批判』が論じる美学や目的論、さらには実践哲学の条件でもあるという。実践哲学について言えばその論理はこのようなものである。「直観的知性」にとっては、知性の把握した概念がそのまま直観可能な現実となっている。そうであるなら、実践理性の把握する道徳法則の内容は、そのまま現実になっていなければならない。しかし、そのような主体——道徳法則が常にすでに実現しているという主体——にとっては、「ねばならない」という意味での「当為」は不可能だろう。かくして、理性による道徳法則が「当為」であることは、人間が「直観的知性」をもっておらず、知性と現実とが常に一致しているわけではないという事情に拠っている。

『エンツュクロペディー』のヘーゲルはカントのこの議論を十分に理解した上で、まさにそれを批判しているのである。直観的知性を人間にとって到達不可能な「理念」としたことでカントは、理念と現実の関係を「当為」によってすましてしまった。カントは理念に、現実優先しなければならぬ「当為」の力を与えながらも、実現する力は与えなかったという、いわば中途半端な態度をとっている。なるほどカントは、理念が歴史において徐々に実現していくという「実践的信仰」については語っている。しかし、人間には不可能であるとした理念と現実の一致が、歴史において実現することをただ「信じる」という態度はヘーゲルにとって矛盾以外のなにものでもない。結果として、カント的な理念は現実となる必要のないものとなり、その具体的な実現の仕方、歴史における実現のプロセスが考慮に入れられることはない。この文脈においてヘーゲルは、カント倫理学が「規定を欠いた」「抽象的である」という例の批判を行っている。そのため、ヘーゲルのカント批判は、単にそれが具体的内容を欠いているというだけではなく、そもそもそれが「当為」によってしか表現できないという点に対して向けられていると言えよう。

それではヘーゲルその人の哲学的、あるいは倫理的立場はいかなるものになるのだろうか。「当為」がしばしば哲学的思考において「逃げ」に使われてしまうという批判は鋭いものとしても、しかしあらゆる「当為」を廃棄した倫理学というものがあるのか。現実を理念が実現するプロセスとみなす立場は、一方では、あらゆるものを理念に従属させる極端な理性への信頼にも見えるし、他方では、どのような現実であれ、それに無理やり理念を合わせた敗北主義的な立場にも見える。このヘーゲルの立場について、たとえば哲学者 S・ジジェクはカントとヘーゲルの知的直観を比較する中で次のように言っている。「では、ヘーゲルにおける[思考と現実の]和解は何に至るのだろうか。それは対立を乗り越えた勝利か、それとも解決できない対立が我々の生の一部、その積極的な条件だということをあきらめて受け入れることだろうか。その答えは、還元できない視差 parallax、すなわち両者である。それは勝利とも、あきらめた敗北とも見えるのだ」(Slavoj Žižek, *Sex and the Failed Absolute*, Bloomsbury Academic 2019, p. 86)。理念と現実の統一を、カントのように目指すべき目標ともせず、フィヒテやシェリングのように原初的な直観にも求めず、現実のプロセスそのものに置いたヘーゲルの立場は、哲学の現実に対する「勝利」とも「敗北」ともつかぬ奇妙なものである。哲学が現実に「勝利」や「敗北」はせずとも、現実とは異なる「当為」によって批判し続けるというカントの立場との差異はどこにあるのか、本発表はそのことに焦点をあててみたい。